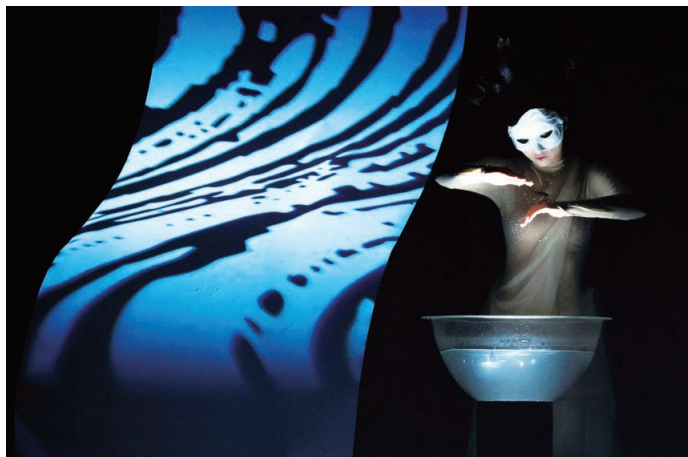


オペラ『TEA ～茶は魂の鏡～』制作にあたって

タン・ドゥン

『TEA』というオペラを作曲するにあたり、私はリサーチのために5年にわたって日本と中国を旅しました。そして、日本の茶が「魂の鏡」であることを学びました。茶の故郷である中国の南部では、ある高名な尼僧に出会いました。彼女は初めて訪れた客に、空の茶碗を差し出します。そして彼女自身も、空の茶碗から茶を飲み干すのですが、その動作のなかに、彼女の内面が見事に表現されていることに気づきました。日本の茶の精神と、中国の彼女の茶の精神から、大いに啓発されたのです。『TEA』の冒頭や曲中に何度か現れる「碗は空なれど though bowl is empty」という言葉は、この体験から生まれたものです。

私はこの作品の中で、『西遊記』や『茶経』など東洋古典の精神を重ね合わせました。『西遊記』が真の経典を求めて旅する物語であるように、『TEA』もまた『茶経』を探し求める巡礼の物語です。そして私は、音楽と言葉にも“二重の意味”を持たせたいと考えました。台本のリズムを音楽に結び付け、音楽の呼吸を言葉へと戻していく。そうすることで、一つの旋律や一つの言葉が、多層的な意味を帯びて響くようになるのです。「色を聴き、音を見る to hear the color, to see the sound」という言葉も、そうした感覚から生まれました。



ウォーター・パーカッション(『TEA』2023年上海公演より)

そうしたことを音楽に表現するための方法として用いたのが、長年追求してきた「有機音楽 organic music」のコンセプトです。これまで私は、水・紙・陶器を楽器として使う実験を続けてきましたが、『TEA』ではそれらを人間の生活や精神そのものと結び付けたいと思いました。『茶経』には、水、風、火、陶器についての記述があります。茶を成立させるそれらの要素は、同時に音楽を成立させる要素でもあると私は感じました。茶室に入る前、人は手水で手を清めます。しかし洗われるのは手だけではなく、心でもあります。音楽もまた同じです。人間の身体、行為、自然、精神が結びついた時に、本当の音楽になるのです。『TEA』は、知性だけで作られた作品ではなく、生活の中から自然に生まれてきた音楽なのです。

私はまた、サントリーホールの「ホール・オペラ[®]」という形式に強い刺激を受けました。通常のヨーロッパ・オペラでは、オーケストラはピットの中に隠れています。しかし私は、奏者の身体の動きや呼吸そのものもドラマだと考えています。このオペラで3人の女性パーカッショニストを舞台に乗せたのもその考えからです。彼女たちは、水や風、運命の精霊として存在しています。紙をめくる音さえ風となり、楽譜そのものも舞台装置の一部になるのです。私はこの形式の中に、日本の能や狂言、中国の古代祭式、さらにはギリシャ劇につながる“開かれた劇場”の精神を見出しました。舞台と客席、演奏と演技、自然音とオーケストラ、その境界をなくしていくことが『TEA』の重要なテーマだったのです。

作曲にあたって、私のプライオリティは、まず有機音楽、そして歌・言葉・物語による構成でしたが、私が最後まで大切にしたのは「メロディ」です。人々が自然に口ずさめる旋律、それこそがオペラの本質だと思っているからです。私は、日本の声明、中国詩の朗読、能、京劇、さらに初期イタリア・オペラからプッチーニまで、多くの歌の伝統から学びました。東洋か西洋か、前衛か伝統かは、私にとって本質ではありません。私にとって大切なのは、音楽が人間の心に直接触れること。『TEA』を通して、私は国境や文化を超えて、人間の魂そのものに届く音楽を書きたいと思ったのです。

私が1998年にサントリーホールで、オペラ『マルコ・ポーロ』を指揮した時、終演後に佐治敬三さん（当時のサントリー株式会社社長／サントリーホール初代館長）が私の楽屋にきてくださいました。彼の目の中に、私は、大変にパワフルな文化的精神を読み取ることができました。サントリーホールが、東洋と西洋の文化の掛け橋となるようにというのが、彼のヴィジョンだったと聞いています。サントリーホールを通して、世界の音楽文化の掛け橋となった20世紀の偉大な人物、佐治敬三さんの思い出に、この作品を捧げたいと思います。

（2002年『TEA』世界初演時のプログラム冊子より内容を抜粋して掲載）



『TEA』2002年世界初演